



Title	アラブ文法学における5分類：枠組みの受容・継承・変革
Author(s)	岡崎, 英樹
Citation	アラブ・イスラム研究. 2022, 20, p. 105-122
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106159
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アラブ文法学における5分類
— 枠組みの受容・継承・変革 —

岡 崎 英 樹

Fivefold Categorization in Arabic Grammar
— Acceptance, Succession, and Modification —

Hideki OKAZAKI

抜 刷

「アラブ・イスラム研究」第20号 2022年

Journal of Arabic and Islamic Studies

مجلة الدراسات العربية والإسلامية

Vol. 20, 2022

アラブ文法学における 5 分類

—— 枠組みの受容・継承・変革 ——

岡崎 英樹*

Fivefold Categorization in Arabic Grammar

—— Acceptance, Succession, and Modification ——

In his work *al-'Uṣūl fī an-Naḥw*, Ibn as-Sarrāğ provided at least 15 grammatical categories consisting of precisely five members. Most of these five divisions were passed down to Ibn as-Sarrāğ's successors, al-Fārisī and Ibn Ğinnī, who contributed to establishing the standard grammatical view developed in the 10th century. However, in later periods, almost all of these works were altered, with the frameworks subject to minor and extensive modifications. For instance, in 10 out of 15 categories, some were drastically reconstructed while others were left as is in grammatical works. This study will consider the formulation process of the fivefold categorization by employing the following. First, the study will analyze the description in Sībawayhi's *al-Kitāb* and al-Mubarrad's *al-Muqtaḍab*, composed in the 8th and 9th centuries, respectively. Second, it will focus on the acceptance of the grammatical standardization in the treatises of az-Zağğāğī, al-Fārisī, and Ibn Ğinnī, who were disciples of Ibn as-Sarrāğ. Finally, it will examine the succession and modification of the categorization by grammarians from the 11th century onward, such as al-Ġurğānī, az-Zamaḥṣarī, Ibn Mālik, al-'Astarābādī, Ibn Hišām, and as-Suyūfī.

1. はじめに

イスラームの5つの柱 (*'arkān al-'islām al-ḥamsa*)、5回の礼拝 (*aṣ-ṣalawāt al-ḥams*)、5つの法判断 (*al-'aḥkām al-ḥamsa*) などと同様に、要素が5つにまとめられているものは、アラブ伝統文法においても多くみられ、いくつかの文法事項の5分類についてはこれまでも考察がなされてきた。岡崎 (2003) は、10世紀のイブン・アッサッラージュ (Ibn as-Sarrāğ, d. 928) が、マフウル及びマフウルに類するものに加え、名詞主格、誓い、呼びかけ、*'inna* とその姉妹語など広範囲に及ぶ文法事項において5分類を行っていることを指摘している。また、Sheyhatovitch (2019) は、「5」という数字が持つ文化的な意味との関連を視野に入れつつ、タンウィーン、名詞の限定、同格語

* 四天王寺大学 准教授

類などに絞って、伝統文法における5分類とその妥当性について詳細な検証を行っている。しかしながら、5分類と文化的背景との関連については、未だに十分な考察に至っていないのが実情である。また、どれだけの5分類が存在し、各々がどの文法書に記されているのか、そして、後世におけるそれらの受容といった観点からの包括的研究は未だに行われていない。これらのことから、アラブ伝統文法を通しての5分類の全体像と、個々の文法項目の受容と継承についての基本的な情報を整理する必要があると考えられる。

本稿では、10世紀のイブン・アッサッラージュが *al-'Uṣūl fī an-Naḥw* (以下、*al-'Uṣūl*) の中で、15の文法項目について行った5分類を起点とし、それ以前のシーバワイヒ (Sībawayhi, d. 793?) の *al-Kitāb* と、アルムバッラド (al-Mubarrad, d. 898) の *al-Muqtaḍab* にみられる記述を検証する。これによって、文法学初期に5分類された各文法項目の標準的見解が定まっていく過程を概観する。次に、イブン・アッサッラージュと同時代の弟子たちの見解を、アッザッジャージー (az-Zaǧǧāǧī, d. 949) の *al-Ġumal*、アルファールスィー (al-Fārisī, d. 987) の *al-'Idāh fī 'Ilm an-Naḥw*、イブン・ジンニー (Ibn Ġinnī, d. 1002) の *al-Luma' fī an-Naḥw* などの記述から、5分類の受容という観点から検証する。そして、11世紀以降、16世紀頃までの文法書の中から、アルジュルジャーニー (al-Ġurǧānī, d. 1078) の *al-Muqtaṣid fī Ṣarḥ al-'Idāh*、アッザマフシャリー (az-Zamaḥṣarī, d. 1144) の *al-Mufaṣṣal fī 'Ilm al-'Arabiyya*、イブン・マールク (Ibn Mālik, d. 1274) の *Ṣarḥ at-Tashīl*、アルアスタラーバーズィー (al-'Astarābāḍī, d. 1287 or 1289) の *Ṣarḥ Kāfiyat Ibn al-Hāǧib*、イブン・ヒシャーム (Ibn Hišām, d. 1360) の *Qaṭr an-Nadā wa-Ball aṣ-Ṣadā*、アッスユューティー (as-Suyūṭī, d. 1505) の *Ham' al-Hawāmi' fī Ṣarḥ Ġam' al-Ġawāmi'* などの記述を検証する。これにより、アラブ文法学の歴史を通して、5分類がどのように受け入れられたか、また、どのように修正され継承されたのかを明らかにする。

2. イブン・アッサッラージュによる5分類

イブン・アッサッラージュの *al-'Uṣūl* は、それ以前の文法書と比べると、系統立った文法事項の配列がなされているため、5分類についても明確に示されていることが多い。また、5分類がなされている文法項目の数も比較的多くみられるため、*al-'Uṣūl* の5分類を起点として、その前後でいかに受け継がれたり、修正されたりしたのかを整理する。

イブン・アッサッラージュの5分類の中には、先人から受け継いだものと、そうではないものがあるが、それらの区別は必ずしも容易ではない。シーバワイヒやアルムバッラドの記述は、同じ範疇で括ることができる項目でも、複数の章に分散して記載がなされているため、著者が5分類を認識しているか否かを読み取ることができない場合も少なくない。

また、他の文法書には記載されているにもかかわらず、*al-'Uṣūl* では言及されていない5分類も存在する。名詞 'ab (父) は、たとえば -ka のような人称代名詞・接尾形

が後続すると、格変化語尾が長母音化して 'abū-ka となる。同様の性質を持つ名詞について、イブン・アッサッラージュの弟子の一人であるアッザッジャージは 'ab, 'ah, ḥam, fam, dū の5つを挙げている¹⁾。しかし、これについてのイブン・アッサッラージュの見解は *al-'Uṣūl* に示されていない。これ以外にも、タンウィーン (tanwīn) の役割の5分類についてもイブン・アッサッラージュの見解を確認することはできない。この5分類について Sheyhatovitch (2019: 89) は、標準化されたのは12世紀のアッザマフシャリー以降であると述べている²⁾。

イブン・アッサッラージュの *al-'Uṣūl fī an-Naḥw* には、文法項目の枠組みを明確に5分類する箇所や、文法事項に該当する語を5つ列挙する箇所が合計で15ある。3巻からなる同書に記載されている順に列挙すると以下の通りである。

- (1) 名詞主格 ('asmā' murtafi'a)
- (2) 限定 (ma'rifa)
- (3) マフウル (maf'ūl)³⁾
- (4) 知覚動詞 ('af'āl al-ḥawāss)
- (5) マフウルに類するもの (mušabbah bi-l-maf'ūl)
- (6) 'inna とその姉妹語 ('inna wa-'aḥawātu-hā)
- (7) 呼びかけ (nidā')
- (8) 誓い (qasam)
- (9) 同格語類 (tawābi')
- (10) 形容・記述 (na't)
- (11) ジュムラに類するもの (allaḍī yuṣbih al-ḡumla)⁴⁾
- (12) 未完了形・要求法をとる辞詞 (ḥurūf allatī taḡzim)
- (13) 複数形が語形 fi'āl をとる名詞 ('abniyat al-ḡumū' fi'āl)
- (14) 4語根素の名詞の語形 ('abniyat al-'asmā' al-rubā'iyya)
- (15) 5語根素の名詞の語形 ('abniyat al-'asmā' al-ḥumāsiyya)

1) *Ḡumal* 18-19. ただし、すべての文法書で5分類が行われているわけではない。Sartori (2010: 36) によると、アッザマフシャリー、アルアンバーリー、イブン・ヒシャームなどの多くの文法家が han (もの) を加え6つを挙げる。

2) アッザマフシャリー以前にも10世紀のアッザッジャージが *al-'Idāh fī 'Ilal an-Naḥw* の中で、タンウィーンが持つ意味を3つに分けて言及している。Versteegh 1995: 168.

3) 本稿では「マフウル」に訳語を与えず用いる。なお、maf'ūl の用語については、Larcher 1991; Levin 1991; Owens 1991; Peled 1999; Taha 2008; Kasher, 2012 を参照。

4) 用語 ḡumla は「文」と解されることが多いが、一般的に、言語学の用語としての「文」を意味するものではない。「複数の語又は要素から成る集合体」などの意味を持ち、文脈によっては「言説」「陳述」「節」「句」「語」などと解釈されうる。スィーパワイヒは文法用語としての ḡumla は用いておらず、おそらくは最初に文法用語として用いたのはアルムバッラドであると考えられる。Cf. Carter 1981: 375; Versteegh 1995: 214.

3. 5分類の変遷

以下では、イブン・アッサッラージュが5分類を行った15の項目の各々について、以前から存在していた枠組みなのかという観点と、10世紀以降も受容されたのかという観点からまとめた。

(1) 名詞主格 ('asmā' murtafi'a)⁵⁾

イブン・アッサッラージュは、名詞主格に属するものとして、①名詞文の主語 *mubtada'* (原義 “それによって始められるもの”)、②名詞文の述語 *ḥabar* (原義 “情報”)、③ [動詞文の] 主語 *fā'il* (原義 “行為者”)、④受動文の [形式上の] 主語 *maf'ūl alladī lam yusamma man fa'ala bi-hi* (原義 “誰が行ったについて言及のないマフウール”) ⁶⁾、⑤主語に類するもの *mušabbah bi-l-fā'il* (原義 “行為者に類するもの”) の5つを列挙している。

イブン・ジンニーは、受動文の主語に *maf'ūl ḡu'ila al-fā'il ḥadīṭ-an 'an-hu* の表現を充てている点異なるが、明確に5分類を行っている⁷⁾。アルファーリスィーは、明確に5分類を行っておらず、該当する名詞主格に属するものを複数の章にまたがって記載している。しかし、章立てからイブン・アッサッラージュの立場を踏襲することが読み取れる⁸⁾。

アッザマフシャリーにおいては、主格は主語であることの特徴 ('alam al-fā'iliyya)⁹⁾ であるとしているが、具体的な分類を示していない。また、章立てからも読み取ることとは困難である。

13世紀の文法書では、名詞主格を 'umda の範疇から解説しているものが現れる。イブン・マーリクは 'umda に5つの名詞主格 (*mubtada'*, *ḥabar*, *fā'il*, *nā'ibu-hu*, *ṣabīḥ bi-hi lafzan*) ¹⁰⁾ を含めて説明する。アルアスタラーバーズィーも同様に、イブン・ハージブの「主格をとるものは、主語であることの特徴を持つものである」という言葉について、動詞文の主語、名詞文の主語、名詞文の補語などを包括する 'umda の範疇から説明する¹¹⁾。

5) 'Uṣūl I, 58, 62, 72, 76, 81.

6) 初期の文法書は「受動文の主語」をマフウールと捉える呼称を選択していた。例えば、スィーバワイヒは *al-maf'ūl alladī ta'addā-hu fī 'lu-hu 'ilā maf'ūl* (*Kitāb* I, 14)、アルムパッラドは *al-maf'ūl alladī lā yuḍkar fā'ilu-hu* (*Muqtaḍab* IV, 50) を用いる。13世紀以降の文献では *nā'ib 'an al-fā'il* (代理の動作主) が用いられることが多い。おそらくはイブン・マーリクによる呼称であると考えられる。Cf. Carter 1981: 169.

7) *Luma'* 9.

8) 'Idāḥ 85, 90, 101, 104, 108ff.

9) *Mufaṣṣal* 18.

10) *ŠT* I, 257. 'umda と faḍla から名詞主格と名詞対格を説明する試みはアッスユーティーにもみられ、3つの格変化語尾に於いて「主格は 'umda、対格は faḍla、属格は二つの中間 raf' li-l-'umad, wa-naṣb li-l-faḍalāt, wa-ḡarr li-mā bayna-humā, *Ham'* I, 75」のように公式化する。

11) *ŠK* I, 70.

(2) 限定 (ma'rifa)¹²⁾

限定についてイブン・アッサッラージュは次のように述べる。「限定には5つのものがある。人称代名詞¹³⁾、指示代名詞¹⁴⁾、固有名詞、アリフとラームがあるもの、他の名詞に属格支配されたもの。wa-l-ma'rifa ḥamsat 'ašyā': al-ism al-maknī, wa-l-mubham, wa-l-'alam, wa-mā fī-hi al-'alif wa-l-lām, wa-mā 'uḍīfa 'ilay-hinna. 'Uṣūl I, 149」

用語の違いこそあれ、スィーバワイヒも明確に5分類を行っている¹⁵⁾。また、アッザッジャージー、アルファーリスィー、イブン・ジンニーなど10世紀の文法家をはじめ、11世紀以降の文法家に5分類が踏襲されている¹⁶⁾。

しかしながら、14世紀以降の文法書には、6分類又は7分類するものも存在する。例えば、イブン・ヒシャームは、① muḍmar (ḍamīr) ② 'alam ③ 'išāra ④ mawṣūl ⑤ maḥallī bi-'alif lām al-'ahdiyya ⑥ muḍāf li-ma'rifa の6分類を行っている¹⁷⁾。アッスユーティーは、① muḍmar ② 'alam ③ 'išāra ④ mawṣūl ⑤ mu'arraḥ bi-'alif lām ⑥ al-muḍāf 'ilā wāḥid min-hā ⑦ munādā¹⁸⁾ の7つに分類する¹⁹⁾。

(3) マフウール (maf'ūl)

イブン・アッサッラージュは、名詞対格 (manṣūbāt) の文脈で、まず、「マフウール (maf'ūl)」と「マフウールに類するもの (muṣabbah bi-l-maf'ūl)」の2つの下位範疇を設定する。そして、マフウールをさらに5分類する²⁰⁾。①同族目的語 (maf'ūl muṭlaq)、②動詞の目的語 (maf'ūl bi-hi)、③時や場所を表す名詞対格 (maf'ūl fī-hi)、④理由を表す名詞対格 (maf'ūl la-hu)、⑤“共に”を意味する名詞対格 (maf'ūl ma'a-hu)の5つである。

スィーバワイヒがいくつのマフウールを認識していたかについて、*al-Kitāb* で読み取ることは容易ではない。しかし、maf'ūl muṭlaq²¹⁾を除けば、後世で用いられることになるマフウールについてはすべて *al-Kitāb* に言及がある。加えて、'iyyā-ka wa-l-'asad-a (ライオンに気をつける) のような対格について、スィーバワイヒは maf'ūl min-

12) 「限定」について5分類の観点から考察したものとして Sheyhatovitch 2019がある。「固有名詞」や「代名詞」については Sakaedani 2019に詳細な考察がある。

13) イブン・アッサッラージュは「人称代名詞」を意味する用語として、ism maknī だけでなく 'idmār も用いている。'Uṣūl II, 32.

14) この文脈での用語 mubham (曖昧な) はイブン・アッサッラージュが hādā, tilka, 'ulā'ika のみを例示していることから「指示代名詞」を意味する。Sakaedani 2019: 238. また、用語 mubham には「関係代名詞」が含まれる場合もある。Sakaedani 2019: 235–246; Sheyhatovitch 2019: 86.

15) al-ma'rifa ḥamsat 'ašyā': al-'asmā' allatī hiya 'alam ḥaṣṣa wa-l-muḍāf 'ilā al-ma'rifa 'idā lam turid ma'nā at-tanwīn, wa-l-'alif wa-l-lām wa-l-'asmā' al-mubhama wa-l-'idmār. (*Kitāb* I, 187)

16) *Ġumal* 27; *'Idāh* 218; *Luma'* 40; *Mufaṣṣal* 197; *ŠK* I, 52.

17) *Šuḍūr* 117, 120, 121, 123, 129, 135; *Qaṭr* 103, 107, 109, 112, 123, 127.

18) munādā の例として、yā raḡul-u が挙げられている。*Ham'* I, 186.

19) *Ham'* I, 186, 190, 232, 244, 256, 263.

20) 'Uṣūl I, 158ff.

21) maf'ūl muṭlaq の用語が確認できるもっとも古い文献はイブン・アッサッラージュの *al-'Uṣūl* であると考えられる。Cf. Levin 1991: 917.

hu と呼んでいる²²⁾。なお、イブン・ヒシャームやアッスユーティーは、クルアーン7章155節の wa-ḥtāra mūsā qawm-a-hu sab'īna raḡul-an (ムーサーは自らの民から70名の男を選んだ) の対格 qawm-a をアッスィーラーフィーが maf'ūl min-hu と呼んだとしている。しかし、多くの文法家がクルアーンのこの章句を紹介するが、maf'ūl min-hu と呼ぶ例は見いだせない²³⁾。maf'ūl min-hu の除外と maf'ūl muṭlaq²⁴⁾ の採用の結果としてのマフフルの5分類は、イブン・アッサッラージュによるところが大きい。

5つのマフフルは、12世紀まではそのまま踏襲された。イブン・ジンニーについては、5つのマフフルの順序までも同一である²⁵⁾。アルファーリスィーやアッザマフシャリーも、maf'ūl la-hu と maf'ūl ma'a-hu の順序が入れ替えている以外は忠実に受け継いだ²⁶⁾。

13世紀のアスタラーバーズィーは、名詞対格については faḍla (原義: “余剰”) の範疇からの説明を行った²⁷⁾。そして、faḍla の範疇には、5つのマフフルに ḥāl、tamyīz、mustatnā を加えた合計8つを組み入れた²⁸⁾。とはいえ、「5つのマフフル (al-maf'ūlāt al-ḥamsa 及び al-mafā'il al-ḥamsa)²⁹⁾」の表現が保持されている点は注目に値する。faḍla の枠組みについて、イブン・マーリクは、下位範疇の捉え方と呼び方が他と異なっている。彼は、5つのマフフルと呼ぶ代わりに、maf'ūl muṭlaq を除く4つのマフフルを muqayyad³⁰⁾ と呼ぶ。

イブン・ヒシャームは、15の名詞対格の枠組みを設定したうえで、「5つのマフフル」をその筆頭に置く³¹⁾。イブン・アージュッルームも15の名詞対格を設定する点は同じであるが、その筆頭に maf'ūl bi-hi、次に maf'ūl muṭlaq、maf'ūl fī-hi を置き、maf'ūl min 'aḡli-hi³²⁾ と maf'ūl ma'a-hu はそれぞれ10番目と11番目に置いている³³⁾。

22) *Kitāb* I, 116. なお、アルムバッラド、アッザマフシャリーをはじめ多くの文法家が同じ例文を引用するが、maf'ūl min-hu の用語は用いていない。 *Muqtaḍab* III, 212-3; *Mufaṣṣal* 48-9; *'Asrār* 168-70; *ŠK* I, 180-3; *Ham'* II, 17-9.

23) *Kitāb* I, 12; *Muqtaḍab* II, 321, 342; IV, 330; *'Uṣūl* I, 178; *Ġumal* 40.

24) イブン・アッサッラージュが *al-'Uṣūl* の中で maf'ūl muṭlaq の用語を使うのは章立ての際の2回のみであり、多くの場合 maṣḍar (動名詞) を用いる。分類・章立てのための用語の使用については岡崎 2003: 20-21 を参照。

25) *Luma'* 20ff.

26) *'Idāḥ* 150ff.; *Mufaṣṣal* 18, 31-60.

27) Cf. *ŠT* I, 257.

28) maf'ūl 及び muṣabbah bi-l-maf'ūl の枠組みを、faḍla の概念で組み替える試みについては、岡崎 2020: 53-55; Okazaki 2022: 191-193 を参照。

29) *ŠK* I, 112, 113.

30) *ŠT* I, 257, 258. 用語 muqayyad については、アルジュルジャーニー (*Muqtaṣid* I, 579-580) が maf'ūl muṭlaq の意味について、huwa alladī lam yuqayyad bi-šay' min ḥurūf al-ḡarr (それは、前置詞に全く制限されていないものである) と説明した動詞 qayyada (枷をはめる; 制限する) に由来する。maf'ūl muṭlaq 以外の4つのマフフルの名称が maf'ūl bi-hi のごとく非人称の受動分詞となっていることについての解釈である。

31) *Šuḡūr* 177ff.; *Qaṭr* 218ff.

32) アッザッジャージーやイブン・ウスフルも maf'ūl la-hu の代わりに maf'ūl min 'aḡli-hi を用いる。 *Ġumal* 305; *Muqarrib* 75, 227; *ŠĠ* II, 451.

33) Carter 1981: 324, 432, 440.

(4) 知覚動詞 ('af'āl al-ḥawāss)

イブン・アッサッラージュは、他動詞についての文脈の中で知覚動詞に触れ、次のように述べている。「naẓar-a (見る), šamm-a (嗅ぐ), sami'-a (聞く), dāq-a (味わう), lamas-a (触れる) の5つの語から成る知覚動詞はすべて他動詞である。wa-'af'āl al-ḥawāss min al-ḥams kullu-hā muta'addiya mulāqīya naḥwa: naẓar-tu, wa-šamam-tu, wa-sami'-tu, wa-ḍuq-tu, wa-lamas-tu. 'Uṣūl I, 170」

多くの文法書や教科書はこの分類に触れていないが、イブン・ヤイーシュは、知覚動詞の例として 'abṣar-a, šamm-a, dāq-a, lamas-a, sami'-a の5つを列挙している³⁴⁾。

(5) マフウールに類するもの (mušabbah bi-l-maf'ūl)

イブン・アッサッラージュは、名詞対格 (manṣūbāt) の文脈で、まずマフウールとマフウールに類するものの2つの下位範疇を設定する。そして、マフウールに類するものとして、①ハール (ḥāl)、②タムイーズ (tamyīz)、③例外表示 (istiṭnā'), ④ kāna とその姉妹語の補語 (ḥabar kāna wa-'aḥawāti-hā)、⑤ 'inna とその姉妹語が用いられる文の主語 (ism 'inna wa-'aḥawāti-hā) の5つに分類している³⁵⁾。マフウールとマフウールに類するものとを分ける発想は、アルムバッラドの次の言葉に遡る。「形式的又は意味的に、マフウール、もしくはマフウールに類するものでなければ、対格をとることではない。lā yantaṣib ṣay' 'illā 'alā 'anna-hu maf'ūl 'aw mušabbah bi-l-maf'ūl fī lafẓ 'aw ma'nā, Muqtaḍab IV, 299」ただし、それらを分ける基準については明確ではない。時や場所を表す名詞対格である maf'ūl fī-hi がマフウールに分類され、ハールやタムイーズがマフウールに類するものに分類される根拠は、おそらくは統語論的な違いに基づくものではなく、単に文法用語によるものである可能性が考えられる。Owens (1991: 231) は、スーバワイヒがマフウールの呼称を与えたものが“真の”マフウールであり、マフウールと呼ばれなかった他の名詞対格が「マフウールに類するもの」³⁶⁾に迫いやられたとの見解を示している。

イブン・ジンニーの *al-Luma'* は、マフウールに類するものの5分類を忠実に継承している³⁷⁾。アルファーリスィーは5分類を明示せず、「kāna とその姉妹語の補語」、「否定の mā の補語 ḥabar mā」、「'inna とその姉妹語が用いられる文の主語」、「タムイーズ」、「ハール」の順に列挙している³⁸⁾。そして、「例外表示 (istiṭnā')」について節を分けて言及しており³⁹⁾、マフウールに類するものの枠組みに入れるかどうかの判別がつかない。

アッザマフシャリーは、ḥāl, tamyīz, mustatnā, ḥabar kāna, ism 'inna の5つに加え、lā

34) *ŠM* VII, 62.

35) *'Uṣūl* I, 213, 228, 229, 281.

36) Owens は pseudo-object と呼ぶ。

37) *Luma'* 26. ただし、イブン・ジンニーの *al-Ḥaṣā'is* には、mušabbah bi-l-maf'ūl の枠組みについて言及はない。

38) *Idāḥ* 171.

39) *Idāḥ* 175 ff.

li-nafy li-l-ğins と ḥabar mā wa-lā の2つを加えた7つの枠組みで捉えている⁴⁰⁾。

前述のイブン・ジンニーは、*al-Luma'*での記述と、*al-Ḥaṣā'ish*での記述には大きな隔たりがある。*al-Ḥaṣā'ish*では、faḍla の枠組みから、maf'ūl bi-hi, zarf, maf'ūl la-hu, maf'ūl ma'a-hu, maṣdar, ḥāl, tamyīz, istiṭnā' の8つを列挙し⁴¹⁾、ism 'inna wa-'aḥawāti-hā と ḥabar kāna wa-'aḥawāti-hā の2つを除外している。このように、maf'ūl ではなく faḍla の概念からの枠組みの構築は、アルアスタラーバーズィーにも引き継がれている⁴²⁾。彼は、5つのマフウルに ḥāl, tamyīz, mustatnā の3つを合わせた、計8つの要素を faḍalāt の中に入れている。そして、faḍla に類するもの (muṣabbah bi-l-faḍalāt) には ism 'inna wa-'aḥawāti-hā, ism lā al-tabri'a, ḥabar mā al-ḥigāziyya, ḥabar kāna wa-'aḥawāti-hā の4つを入れた。

(6) 'inna とその姉妹語 ('inna wa 'aḥawātu-hā)

イブン・アッサッラージュは、'anna を除外して、① 'inna ② lākinna ③ layta ④ la'alla ⑤ ka'anna の5つを列挙している⁴³⁾。

スーバワイヒも 'anna は名詞であるとして除外している⁴⁴⁾。これに対し、アルムバッラドは、動詞に類する5つの辞詞 (al-'aḥruf al-ḥamsa al-muṣabbaha bi-l-'af'āl) として 'inna, 'anna, lākinna, ka-'anna, layta, la'alla の6つを列挙するも、'inna と 'anna を同一視して一つに数える⁴⁵⁾。

10世紀以降、多くの文法書は 'anna を含め6つを列挙する⁴⁶⁾。アルファーリスィーは 'inna と 'anna を含め6つを列挙し、さらに、'inna と 'anna が異なることに重点を置いた解説を行っている⁴⁷⁾。

少数の文法書には、5分類を主張するものがある。イブン・マーリクは、'anna が 'inna の枝分かれ (far') であるとして、'anna を含める必要がないと主張する⁴⁸⁾。アッスユーティーも、スィーバワイヒ、アルムバッラド、イブン・アッサッラージュ、イブン・マーリクの名前を挙げて、5分類を明言している⁴⁹⁾。

(7) 呼びかけ (nidā')

イブン・アッサッラージュは呼びかけの辞詞として、① yā ② 'ayā ③ hayā ④ 'ay ⑤ 'a- の5つを列挙している⁵⁰⁾。

40) *Mufaṣṣal* 18.

41) *Ḥaṣā'ish* I, 197.

42) *ŠK* I, 113. なお、faḍla の概念から従来のマフウルの組み換えの過程については、岡崎2020: 53–55; Okazaki 2022: 191–193 を参照。

43) *Uṣūl* I, 229.

44) *Kitāb* I, 410. なお、'anna を 'inna の範疇に組み入れる過程については Kasher 2010–2011: 251–253.

45) *Muqtaḍab* IV, 107.

46) *Ġumal* 64; *Luma'* 17; *Muqtaṣid* I, 443; *Awāmil* 147; *Mufaṣṣal* 292; *Alfiyya* v. 174; *Qaṭr* 161.

47) *Idāḥ* 123.

48) *ŠT* I, 387.

49) *Ham'* I, 425.

50) *Uṣūl* I, 329.

スィーバワイヒ、アルムバッラドも全く同じ順序で5語を列挙している⁵¹⁾。また、10世紀以降のアッザッジャージー、イブン・ジンニー、アルジュルジャーニーの文法書にも踏襲されている⁵²⁾。これに対し、アルファーリスィーは、呼びかけの章の中では yā の解説に終始しており、他の4語について触れていない⁵³⁾。

一方、アッザマフシャリー、イブン・マーリク、アルアスタラーバーズィー、イブン・ヒシャームは、哀悼 (nudba) に用いられる wā を加え6つ列挙している⁵⁴⁾。イブン・ヤイーシュは、yā の用途の万能さについて、近くにいる人、遠くにいる人、起きている人、眠っている人、気づいていない人、近づいてくる人にも用いられると述べ、救援、驚嘆のほか、wā の代わりに哀悼にも用いられる可能性があることを指摘している⁵⁵⁾。

アッスユーティーは、'a-, 'ay, yā, 'ayā, hayā, 'āy, 'ā-, wā の計8つの呼びかけの辞詞を認めている。ただし、この順序は、使用頻度や代表的なものであるとの認識とは関係がなく、筆頭に挙げている 'a- について、「遊牧民の言葉でこれが用いられるのは少ない」とのイブン・マーリクの記述を紹介している。また、3番目に挙げている yā を「章の母 ('umm al-bāb)」と呼び、アブー・ハイヤーンを引用し「最も一般的な辞詞 ('a'amm al-ḥurūf)」との評価を紹介している⁵⁶⁾。さらに、wā については、哀悼以外の用例として、ウマル・イブン・アルハッターブがアムル・イブン・アルアースに向かって言った「wā 'aḡab-an la-ka yā ibn-a al-'āṣ (素晴らしいことよ、イブン・アルアースよ)」の例を示している⁵⁷⁾。

(8) 誓い (qasam)

イブン・アッサッラージュは、誓いの辞詞として、① wa- ② bi- ③ ta- ④ li- ⑤ min の5つを列挙したうえで、「これらのうち最も頻度が高いものは wa- 次いで bi- である fa-'akṭaru-hā al-wāw ṭumma al-bā'. 'Uṣūl I, 430」とし、min については、スィーバワイヒが伝えるものであると述べている⁵⁸⁾。

確かに、上記のイブン・アッサッラージュの記述の多くは、スィーバワイヒから受け継いだものであることが確認できる⁵⁹⁾。

しかしながら、10世紀以降の文法書で5つを列挙しているものは少なく、イブン・ジンニーやアルジュルジャーニーは bi-, wa-, ta- の3語であると明言している⁶⁰⁾。アル

51) *Kitāb* I, 283; *Muqtaḍab* IV, 233.

52) *Ġumal* 168; *Luma'* 43; *Awāmil* 196.

53) *Īdāḥ* 187–191.

54) *Mufaṣṣal* 309; *Alfiyya* v. 574; *ŠT* III, 271ff.; *ŠK* II, 381; *Qaṭr* 244.

55) *ŠM* VIII, 118.

56) *Ham'* II, 26–27.

57) *Ham'* II, 28.

58) *Uṣūl* I, 431. これは、遊牧民の中には、min rabbī la-'af'alanna ḡālika と言うものがあるとのスィーバワイヒが伝える用例を引用したもの。 *Kitāb* II, 147.

59) *Kitāb* II, 146.

60) *Luma'* 73; *Awāmil* 139–141.

ファーリスィーは、wa- を基本的なものとみなし、ta- や bi- に置き換えられる例に言及している⁶¹⁾。アッザッジャージーは wa-, bi-, ta-, li- の4種を⁶²⁾、アッザマフシャリーは wa-, ta-, li-, min の4種類を列挙する⁶³⁾。

アッスユーティーは5つを列挙するが、「bi- これは基本的なものである al-bā' wa-hiya al-'aṣl, *Ham'* II, 391」とみなしている点と、min の代わりに 'aymun⁶⁴⁾ を並べている点がイブン・アッサッラージュとは異なる。

(9) 同格語類 (tawābi')

イブン・アッサッラージュは、「同格語類は5つである。強化・確証、形容・記述、明解の結合、換言の結合、辞詞による結合である。これら5つのうち4つは、媒介語なしに後続し、5つ目のものは辞詞の介在なしには後続することはない。at-tawābi' ḥamsa: at-tawkīd wa-n-na't wa-'aṭf al-bayān wa-l-badal wa-l-'aṭf bi-l-ḥurūf, wa-hāḍihi al-ḥamsa: 'araba'a tatba' bi-ḡayr mutawassiṭ, wa-l-ḥāmis wa-huwa al-'aṭf lā yatba' 'illā bi-tawassuṭ ḥarf, 'Uṣūl II, 19」と述べている。

①「強化・確証 (tawkīd)」は二つに分類される。

(a)「名詞⁶⁵⁾の繰り返しによる強化・確証 tawkīd bi-takrīr al-ism, 'Uṣūl II, 19」

例: marar-tu bi-zayd-in zayd-in

(b)「包括、一般化のための [強化・確証] li-l-'ihāṭa wa-l-'umūm, 'Uṣūl II, 21」

例: ḡā'-a-nī al-qawm-u kull-u-hum.

②「形容・記述 (na't)」

後述 (10) で示すように、さらに5つに細分化している。

③「明解の結合 ('aṭf al-bayān, 'Uṣūl II, 45)」

「形容・記述」と類似しているが、動詞から派生した名詞ではない点で「形容・記述」と区別される。例: ra'ay-tu zayd-an 'ab-ā 'amr-in.

④「換言の結合 ('aṭf al-badal, 'Uṣūl II, 46–49.)」

4つのタイプに分け解説している。「明解の結合」は、yā 'aḥ-ā-nā zayd-an のごとく、第一語を修飾する形容詞であるかのように付加される。したがって zayd-an は 'aḥ-ā-nā に合わせ対格をとる。これに対し、「換言の結合」は、yā 'aḥ-ā-nā zayd-u のごとく、第一語に置き換え可能な形で付くため、あたかも yā に直接付いているかのようにタンウィーンを失った主格 zayd-u となる。

⑤「辞詞による結合 (al-'aṭf bi-l-ḥarf, 'Uṣūl II, 55–60.)」

前の名詞又は動詞に後続の語の格を合わせる10の結合辞詞 ('aṣarat 'aḥruf yutbi'-na mā ba'da-hunna mā qabla-hunna min al-'asmā' wa-l-'af'āl, 'Uṣūl II, 55) があるとみ

61) 'Idāḥ 202, 208.

62) Ġumal 82.

63) Muḥaṣṣal 345.

64) 他に、'īmun, 'ayman, 'īman, 'īmu, 'aymu, 'īmi, haymu, 'ama, 'amu, 'ami, 'imu, 'ima, munu, mu などの変異が存在する。*Ham'* II, 394–395.

65) ism は名詞であるが、この文脈では動詞、辞詞、節の場合も含む。

なす。例：wa-, fa-, tumma, 'aw, 'immā, lā, bal, lākin, 'am, ḥattā

Sheyhatovitch (2019: 98) によれば、スィーバワイヒは *tawābi'* のカテゴリーに触れておらず、アルムバッラドは関連するテーマに言及はあるものの体系化していない。

10世紀以降の文法書では、細部は異なるものの5分類は保たれたと言える⁶⁶⁾。しかし、明解の結合 ('aṭf al-bayān) と換言の結合 ('aṭf al-badal) を同一視する見解もある。例えば、アッザジャージは、明解の結合を除外し4分類を列挙している⁶⁷⁾。これを支持する4分類を採用した文法書もあり、明解の結合をめぐる論争が繰り返されてきた。アルバタルヤウスィー (al-Baṭalyawsī, d. 1127) による4分類批判と、その後のアルアスタラーバーズィーによる明解の結合と換言の結合についての反論⁶⁸⁾ については、Sheyhatovitch (2019: 101–106) が詳述している。

(10) 形容・記述 (na't, ṣifa)⁶⁹⁾

イブン・アッサラージュは、上述の同格語類 (*tawābi'*) のひとつである形容・記述をさらに5つに分類した。5分類の中にさらなる5分類が存在する形である。それぞれの文法的な解説については、Sheyhatovitch (2019, 99–100) に詳しい。

- ①「描写された人・物自体又はそれに関連するものの容姿や外観 ḥilya li-l-mawṣūf takūn fī-hi 'aw fī ṣay' min sababi-hi⁷⁰⁾」

例：marar-tu bi-raḡul-in 'azraq-a/'aḥmar-a/'awīl-in/qaṣīr-in

maḍay-tu 'ilā raḡul-in 'awīl-in 'aḥ-ū-hu

- ②「描写された人・物自体又はそれに関連するものが行う動作 fī'l li-l-mawṣūf yakūn bi-hi fā'il 'aw mutṭaṣil bi-ṣay' min sababi-hi」

例：marar-tu bi-raḡul-in qā'im-in/nā'im-in/ḍārib-in

marar-tu bi-raḡul-in ḍārib-in 'ab-ū-hu

- ③「[描写された人・物自体又はそれに関連するものが] 行った動作や容姿や外観以外のもの waṣf laysa bi-'amal wa-lā bi-ḥilya」

例：marar-tu bi-raḡul-in 'ālim-in/'āqil-in

marar-tu bi-raḡul-in 'ālim-in 'ab-ū-hu

- ④「血縁、地縁、生業、その他の関係 waṣf yunsab 'ilā 'ab 'aw balda 'aw ṣinā'a 'aw ḍarb min aḍ-ḍurūb」

例：marar-tu bi-raḡul-in ḥāṣimiyy-in/'arabiyy-in

- ⑤「関係代名詞の dū ではなく、“持ち主”を意味する dū を用いた描写 al-waṣf bi-dī

66) 'Idāḥ 214; Luma' 33; Mufaṣṣal 111; Qaṭr 309; Šuḍūr 313; ŠT III, 150; Ham' III, 113.

67) Ġumal 26.

68) ŠK I, 337.

69) 'Uṣūl II, 23ff. イブン・アッサラージュは用語 na't を用いる。この用語についてアッスユーティーは、アブー・ハイヤーンの言葉としつつ、クワファ学派の用語であるが、バスラ学派も多く用いるとしている。また、バスラ学派の多くが waṣf 及び ṣifa を使用すると述べている。Ham' III, 117.

70) もとは「紐；ロープ」を意味する名詞 sabab をスィーバワイヒが「変則的な格変化をもたらす統語的要素間の意味的つながり」を意味する文法用語として導入した。この場合の min sababi-hi は「意味的に関連した」を意味する。Carter 2009: 101.

allatī fī ma'nā ṣāhib lā bi-dū allatī fī ma'nā alladī]

例: marar-tu bi-raḡul-in dī 'ibil-in

上記のような5分類は、後の文法家によって継承されたとは言い難く、同様の記述を文法書に見出すことは困難である。アルファーリスィーは用語 *ṣifa* を用いるものの、イブン・アッサッラージュと同様の5分類を継承している⁷¹⁾。

(11) ジュムラに類するもの (alladī yuṣbih al-ḡumla)

イブン・アッサッラージュは、「名前として用いられると、その形式が何かを言い表すものと、何かを言い表すことが許されないもの *mā yuḥkā min al-kalim 'idā summiya bi-hi wa-mā lā yaḡūz 'an yuḥkā*」の例として動詞と動作主からなる人名 *ta'abbata šarr-an* (原義“彼は害悪を小脇に抱えた”)などのジュムラ⁷²⁾をあげたうえで、それ以外の「ジュムラに類するもの *alladī yuṣbih al-ḡumla*」の例を5つ列挙している。「ジュムラに類するものは5種類ある。関係節、形容詞が後続する名詞、前置詞句、複数の辞詞から成る語、辞詞動詞⁷³⁾ *alladī yuṣbih al-ḡumla wa-huwa 'alā ḥamsat 'aḍrub: ism mawṣūl, wa-sm mawṣūf wa-ḥarf ma'a ism, wa-ḥarf ma'a ḥarf wa-fi'l ma'a ḥarf. 'Uṣūl II, 104*」

これは、スィーバワイヒが「語句の中で名称のあり様が変わらないものの章 *al-ḥikāya allatī lā taḡayyar fī-hā al-'asmā' 'an ḥāli-hā fī al-kalām Kitāb II, 59*」や、アルムバッラドの「名称のうち意味が語られ、格変化するもの *mā yuḥkā min al-'asmā' wa-mā yu'rab Muqtaḍab IV, 9*」の文脈で例示されるものである。しかしながら、両者とも5つに分類しているわけではない。さらに、10世紀以降の文法書にも該当する5分類を見出すことはできなかった。

(12) 未完了形・要求法をとる辞詞 (al-ḥurūf allatī taḡzim)⁷⁴⁾

イブン・アッサッラージュは、動詞の未完了形・要求法をとる辞詞を、① *lam* ② *lammā* ③ *lā* ④ *li-* ⑤ *'in* の5つであるとしている。そのうえで、①～④と⑤を二分し、⑤の *'in* (条件を表す辞詞 *ḥarf al-ḡazā'*)⁷⁵⁾のみ省略又は置換が可能であると説明している⁷⁶⁾。

71) *'Idāh* 216.

72) スィーバワイヒやアルムバッラドは、この場合 *ḡumla* を用いておらず、また、5分類も行っていない。 *Kitāb II, 59; Muqtaḍab IV, 9*.

73) *hāluma* (連れて来い) や *ḥayya hala* (来い) などの動詞のごとく命令の意味を持つ間投詞について、一般に「辞詞 *ḥarf*」とは呼ばれず、「名詞と称される動詞 *al-fi'l summiya fī-hi bi-'asmā'*, *Kitāb I, 102*)」、「動詞と称される名詞 *al-'asmā' allatī summū al-fi'l bi-hā*, *'Uṣūl I, 141*」などと呼ばれる。アッザマフシャリーなど多くの文法家は *'asmā' al-'af'āl* 又は *'asmā' al-fi'l* (単数 *ism al-fi'l*) と呼ぶ。 *Mufaṣṣal* 151, 165.

74) *'Uṣūl II, 156*.

75) 条件を意味する *ḡazā'* の用語は、スィーバワイヒ、アルムバッラド、アッザッジャージー、アルファーリスィーも用いる。 *Kitāb II, 384–386; Muqtaḍab II, 46, 55; Ġumal* 217; *'Idāh* 250. イブン・ジンニーは *ḥarf aṣ-ṣart* を用いる。 *Luma' 53*.

76) *'Uṣūl II 156–158*.

スィーバワイヒは lam, lammā, li-, lā の4つとは別の章で 'in を扱っており⁷⁷⁾、これら5つを1つの範疇に入れているかどうかの判別が困難である。アルムバッラドは、イブン・アッサラージュと同じく、明確に5分類を行っていることが確認できる⁷⁸⁾。イブン・ジンニーも、5つあると明言している⁷⁹⁾。

アルファーリスィーは、まず lam, lā, li-, 'in の4つを列挙し、lammā については、lam に mā がついたものであると説明して除外している⁸⁰⁾。アッザマフシャリーは、mā, 'ayyan, bi-man を追加して、合計8語を列挙している⁸¹⁾。イブン・ヒシャームは、lam, lammā, li-, lā に加え、'in, man, mahmā, matā など条件文を形成する辞詞を挙げている⁸²⁾。アッスユーティーは、li-, lā, lam, lammā の4つをあげる⁸³⁾。

(13) 「複数形が語形 fi'āl をとる名詞 ('abniyat al-ğumū' fi'āl)」

イブン・アッサラージュは、「複数形の語形の一つに fi'āl がある。これは、fa'l, fa'al, fa'il, fa'ul, fu'l の5種類の語形[を持つ名詞]の複数形である。min 'abniyat al-ğumū' fi'āl: wa-huwa ġam' ħamsat 'abniya: fa'l, fa'al, fa'ul, fi'l, fu'l. 'Uṣūl II, 433」⁸⁴⁾と述べている。具体的な単語例の一部を挙げると、kalb-kilāb; ġamal-ġimāl; raġul-riġāl; bi'r-bi'ār; ġumd-ġimād ('Uṣūl II, 433-434) などである。

これらに該当する記述が見つかったのは、アッスユーティーの Ham' のみであったが、さらに4つの語形 fa'la, fa'ala, fa'lān, fa'ir (例: ġafna-ġifān; raqaba-riqāb; ġaḍbān-ġidāb; namir-nimār) が加えられている⁸⁵⁾。

(14) 「4語根素の名詞の語形 ('abniyat al-'asmā' al-rubā'iyya)」

イブン・アッサラージュは、4つの語根素から成る名詞の語形について、fa'lal, fi'lil, fi'lal, fu'lul, fi'all の5つであると述べている。語形の具体例としては、それぞれ ġa'far, zibriġ, dirham, turtum, fiṭaḥlなどを挙げている⁸⁶⁾。

スィーバワイヒは、4つの語根素から成る名詞を banāt al-'arba'a と呼び、上記と同様の語を列挙している⁸⁷⁾。

アッザマフシャリーも5つの語形の立場を踏襲している⁸⁸⁾。イブン・ヤイーシュも5分類を支持している。彼は、アブー・アルハサンが ġuḥḍab のような6番目の語形

77) Kitāb I, 56, 363, 386.

78) Muqtaḍab II, 44.

79) Luma' 53.

80) 'Idāḥ 250.

81) Mufaṣṣal 252.

82) Šuḍūr 257. Cf. Qaṭr 89ff.

83) Ham' II, 443-448.

84) al-Fatḥī 校訂の al-'Uṣūl は、当該箇所が fa'l, fa'al, fa'il, fa'ul, fu'l となっている。例示された名詞の語形に合わせ、3番目と4番目の語形をそれぞれ fa'ul, fi'l に修正した。

85) Ham' III, 315-317.

86) 'Uṣūl III, 181-183.

87) Kitāb II, 366-367.

88) Mufaṣṣal 242.

fu‘lal を加えていることについて、スィーバワイヒがこれに言及していない点や、*ḡuḥdub* の読み方が正しいとする説を挙げており、6分類を支持していないことが読み取れる⁸⁹⁾。アッスユーティーも同様に、fu‘lal の語形を6つ目に加える説に触れるが、*ḡuḥdab* の母音符号の付け方に異論を唱えている⁹⁰⁾。

(15) 「5語根素の名詞の語形 (‘abniyat al-’asmā’ al-ḥumāsiyya)」

イブン・アッサラージュは、スィーバワイヒが列挙した fa‘allal, fa‘lalil, fu‘allil, fi‘lall の4つの語形に fu‘lalil を追加し、合計5つの語形を挙げている。具体例として、それぞれ farazdaq, ḡaḥmariš, quḍa‘mil, qirṭa‘bなどを挙げ、5つ目の例 hundali‘ はスィーバワイヒが言及していないものであると述べている⁹¹⁾。

確かに、スィーバワイヒは4つの語形のみと言及しており、5つ目の fu‘lalil 及びその具体例について触れていない⁹²⁾。アルムバッラドも同様に「4つの例」と明言し、fu‘lalil に言及していない⁹³⁾。

アッザマフシャリーも、4つの語形であると述べている。イブン・ヤイーシュは、ムハンマド・イブン・アッサリー⁹⁴⁾が挙げた5番目の例 hundali‘については、語中の /n/ が付加物 (zā‘ida) であるとして、4語根素と見なすべきだと主張する⁹⁵⁾。アッスユーティーも、4つの語形に限定する立場を支持し、スィーバワイヒがこの語形に言及していないことを指摘するとともに、/n/ が付加されたとするアブー・ハイヤーンの言葉を紹介している⁹⁶⁾。

4. 継承されなかった5分類

イブン・アッサラージュが5つに分類している15項目について、8世紀から16世紀までの文法家の記述をたどってきた。以下に、後世の文法家たちに概ね受け入れられた5分類と、大きな修正や変更が行われた5分類とに分けて整理する。

A. 概ね受け入れられた5分類

名詞主格 (‘asmā’ murtafi‘a)

限定 (ma‘rifa)

マフウール (maf‘ūl)

同格語類 (tawābi‘)

4語根素の名詞の語形 (‘abniyat al-’asmā’ al-rubā‘iyya)

89) *ŠM* VI, 136.

90) *Ham’* III, 258.

91) *‘Uṣūl* III, 184–186.

92) *Kitāb* II, 373–374.

93) *Muṣṭaḍab* I, 68.

94) イブン・アッサラージュを指す。

95) *ŠM* VI, 143.

96) *Ham’* III, 260.

B. 大きな修正や変更が行われた5分類

知覚動詞 ('af'āl al-hawāss)

マフウールに類するもの (mušabbah bi-l-maf'ūl)

'inna とその姉妹語 ('inna wa 'aḥawātu-hā)

呼びかけ (nidā')

誓い (qasam)

形容・記述 (na't)

ジウムラに類するもの (allaḍī yuṣbih al-ḡumla)

未完了形・要求法をとる辞詞 (ḥurūf allatī taḡzim)

複数形が語形 fi'āl をとる名詞 ('abniyat al-ḡumū' fi'āl)

5語根素の名詞の語形 ('abniyat al-'asmā' al-ḥumāsiyya)

概ね受け入れられた5分類は、最大でも5つの文法項目に限られる。しかし、特に13世紀以降の文法書では、5分類が受容されていない例が目立った。比較的多くの文法家が受け入れた「5つのマフウール」に関しても、すでに10世紀には、イブン・ジンニーの *al-Ḥaṣā'is* において、マフウール及びそれに類するものの枠組み全体を *faḍla* の範疇から組み換えようとする試みが始まっている。そして13世紀になると、「5つのマフウール」の呼称は残ったまま、枠組みが大きく変わるようになった。

大きな修正や変更を受けた5分類の多くは、10世紀の弟子たちの段階で修正が加えられ、要素の増減が見られたり、文法書に取り上げられること自体がなくなっていった。たとえば、「'inna とその姉妹語」と「誓い」は、アルファーリスィーもイブン・ジンニーも5分類を採用しなかった。また、アルファーリスィーは「マフウールに類するもの」と「呼びかけ」について、師とは明確に異なる枠組みを提示している。これらに加え、「形容・記述」「ジウムラに類するもの」「未完了形・要求法をとる辞詞」「複数形が語形 fi'āl をとる名詞」「4語根素の名詞の語形」「5語根素の名詞の語形」の6項目については、アルファーリスィーの *al-'Idāḥ fī 'Ilm an-Naḥw* 及びイブン・ジンニーの *al-Luma' fī an-Naḥw* で取り上げられていないことが確認された。

以上のことから、個々の文法書で5分類を目にする機会が多いように見えたとしても、時代を通して受容され、継承され続けたものは限られていると言ってよかろう。

5. おわりに

10世紀の文法家イブン・アッサッラージュの *al-'Uṣūl fī an-Naḥw* にみられる5分類を起点とし、それ以前の文法家、同時代の弟子たち、11世紀以降の文法家に分けて、時代による見解の変遷を検証してきた。5分類がなされた15の文法項目のうち、名詞主格、限定、マフウール、同格語類、4語根素の名詞の語形の5項目については、枠組みが比較的維持されたといえる。しかし、これらを含め15項目のすべてが、程度の差こそあれ何らかの修正や改変が加えられたことが確認された。マフウールについて

も、「5つのマフウール」の表現そのものは継承されたが、13世紀以降に大きな枠組みの変更が行われたのである。つまり、アラブ伝統文法の歴史を通し、主要な文法家から一貫して支持を得た5分類は皆無であるとも言えよう。スィーバワイヒからアルムバッラドを経てイブン・アッサッラージュに至る8世紀から10世紀までの時期は、文法書によって用語やアプローチに大きな隔たりがある。これに比べると、10世紀以降は標準的な用語や文法項目が概ね定まり、大きな枠組みの修正や変更が少なくなる傾向にあった。しかし、5分類の枠組みに関する限り、10世紀以降も絶えず変更が行われていたことが確認された。*al-'Uṣūl fī an-Naḥw* の章の配列や文法的な枠組みを踏襲した、アルファーリシーの *al-'Idāḥ fī 'Ilm an-Naḥw* や、イブン・ジンニーの *al-Luma' fī an-Naḥw* でさえ、5分類の多くについて受容せず、自らの見解に基づき修正を加えたのである。これらの文法家には、先人の文法家の見解を無批判に受け入れたり、5分類の枠組みを維持しようとする意図やこだわりが見られず、むしろ、自らの見解を積極的に文法書に記載しようとする姿勢を読み取ることができる。数合わせよりも、純粹に言語的な分析に徹しようとする立場が優先されているのは明らかである。なお、本稿では5分類に絞って考察を行ったが、*al-'Uṣūl fī an-Naḥw* には50を超える3分類が存在する。品詞の3分割を説明した「語は名詞、動詞、辞詞の3つから成る。*al-kalām ya'talif min ṭalāṭat 'ašyā': ism wa-fi'l wa-ḥarf*, *'Uṣūl* I, 36」はその代表的なものである。これについての考察は、別の機会に譲りたい。

[参考文献]

[アラビア語原典]

- 'Astarābādī, *ŠK* = Muḥammad b. al-Ḥasan Raḍī ad-Dīn al-'Astarābādī, *Šarḥ Kāfiyat Ibn al-Hāḡib*. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 2 vol., 1969.
- Fārisī, *'Idāḥ* = 'Abū 'Alī al-Ḥasan ibn 'Aḥmad al-Fārisī, *Kitāb al-'Idāḥ*. Ed. by Kāzīm Baḥr al-Marḡān. Bayrūt: 'Ālam al-Kutub, 1996.
- Ġurḡānī, *Muqtaṣid* = 'Abd al-Qāhir b. 'Abd ar-Raḥmān b. Muḥammad 'Abū Bakr al-Ġurḡānī, *Kitāb al-Muqtaṣid fī Šarḥ al-'Idāḥ*. Ed. by Kāzīm Baḥr al-Marḡān. Baḡdād: Manšūrāt Wizārat at-Taḡāfa wa-l-'I'lām, 2 vol., 1982.
- Ibn as-Sarrāḡ, *'Uṣūl* = Muḥammad b. as-Sarī b. Sahl 'Abū Bakr Ibn as-Sarrāḡ al-Baḡdādī, *al-'Uṣūl fī an-Naḥw*. Ed. by 'Abd al-Ḥusayn al-Fatḥī. Bayrūt: Mu'assasat ar-Risāla, 3 vol., 1985.
- Ibn Hišām al-'Anšārī, *Qaṭr* = Ġamāl ad-Dīn 'Abū Muḥammad 'Abdullāh b. Yūsuf Ibn Hišām al-'Anšārī, *Qaṭr an-Nadā wa-Ball aṣ-Šadā*. Ed. by Muḥammad Muḥyī ad-Dīn 'Abd al-Ḥamīd. Bayrūt: al-Maktaba al-'Ašriyya, 1988.
- Ibn Hišām al-'Anšārī, *Šudūr* = Ġamāl ad-Dīn 'Abū Muḥammad 'Abdullāh b. Yūsuf Ibn Hišām al-'Anšārī, *Šudūr ad-Daḥab*. Ed. by Muḥammad as-Sa'dī Farḥūd. Bayrūt: Dār al-Kitāb al-Lubnānī, 1999.
- Ibn Mālik, *ŠT* = Muḥammad b. 'Abdullāh b. 'Abdullāh 'Abū 'Abdullāh Ġamāl ad-Dīn at-Tā'ī al-Ġayyānī al-'Andalusī Ibn Mālik, *Šarḥ at-Taḥṣīl*. Ed. by Muḥammad 'Abd al-Qādir 'Aṭā & Tāriq Fathī as-Sayyid. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 3 vol., 2001.
- Ibn Ya'īs, *ŠM* = Muwaffaq ad-Dīn. *Šarḥ al-Mufaṣṣal*. 10 vols. Beirut: 'Ālam al-Kutub, n.d.
- Ibn 'Uṣfūr, *Muqarrib* = 'Abū Ḥasan 'Alī ibn al-Mu'min ibn Muḥammad Ibn 'Uṣfūr al-Ḥaḍramī

- al-ʿIṣbīlī, *al-Muqarrib*. Ed. by ʿĀdil ʿAḥmad ʿAbd al-Mawḡūd & ʿAlī Muḥammad Muʿawwad. Bayrūt: Dār al-Kutub al-ʿIlmiyya, 1998.
- Ibn ʿUṣfūr, *Šarḥ Ġumal* = ʿAbū Ḥasan ʿAlī ibn al-Muʿmin ibn Muḥammad Ibn ʿUṣfūr al-ʿIṣbīlī, *Šarḥ Ġumal az-Zaġġāġī*. Ed. by Šāḥib ʿAbū Ġanāḥ. 2 vols. Baġdād: Dār al-Kutub li-ṭ-Ṭibāʿa wa-n-Našr, 1980.
- Ibn Ġinnī, *Ḥaṣāʾiṣ* = ʿUṭmān b. Ġinnī ʿAbū al-Faṭḥ al-Mawṣilī, *al-Ḥaṣāʾiṣ*. Ed. by Muḥammad ʿAlī an-Naġġār. al-Qāhira: Dār al-Kutub al-Miṣriyya, 3 vol., 1952-1956.
- Ibn Ġinnī, *Luma* = ʿUṭmān b. Ġinnī ʿAbū al-Faṭḥ al-Mawṣilī, *Kitāb al-Luma ʿfī an-Naḥw*. Ed. by Hadi M. Kechrida. Stockholm: Almqvist & Wiksell, 1976.
- Mubarrad, *Muqtaḍab* = Muḥammad b. Yazīd b. ʿAbd al-ʿAkbar ʿAbū al-ʿAbbās aṭ-Ṭimālī al-ʿAzdī al-Mubarrad, *al-Muqtaḍab*. Ed. by Muḥammad ʿAbd al-Ḥāliq ʿUḍayma. Bayrūt: ʿĀlam al-Kutub, 4 vol., n.d.
- Sībawayhi, *Kitāb* = ʿAmr b. ʿUṭmān b. Qanbar ʿAbū Bišr Sībawayhi, *Kitāb Sībawayhi*. (*Le livre de Sībawaihi. Traité de grammaire arabe par Sībouya, dit Sībawaihi*) Ed. by Hartwig Derenbourg. Paris: Imprimerie nationale, 2 vol., 1881-1889, reprint Hildesheim & New York: Georg Olms Verlag, 2 vol., 1970.
- Suyūṭī, *Ham* = ʿAbd ar-Raḥmān b. ʿAbī Bakr b. Muḥammad b. Sābiq ad-Dīn Ġalāl ad-Dīn al-Ḥuḍayrī aš-Šāfiʿī as-Suyūṭī, *Ham ʿal-Hawāmiʿ fī Šarḥ Ġamʿ al-Ġawāmiʿ*. Ed. by ʿAḥmad Šams ad-Dīn. Bayrūt: Dār al-Kutub al-ʿIlmiyya, 4 vol., 1988.
- Zaġġāġī, *Ġumal* = ʿAbū al-Qāsim ʿAbd ar-Raḥmān b. ʿIṣḥāq az-Zaġġāġī, *al-Ġumal*. Ed. by Mohammed Ben Cheneb. Paris: Klincksieck, 2nd ed., 1957.
- Zamaḥṣarī, *Mufaṣṣal* = Ġār Allāh ʿAbū al-Qāsim Maḥmūd b. ʿUmar b. Muḥammad b. ʿAḥmad al-Ḥawārizmī al-Zamaḥṣarī, *al-Mufaṣṣal fī ʿIlm al-ʿArabiyya*. Bayrūt: Dār al-Ġīl, n.d.

〔二次文献〕

- Carter, Michael G. 1981. *Arab Linguistics. An Introductory Classical Text with Translation and Notes*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins, coll. “Studies in the History of the Language Sciences” 24.
- Carter, Michael G. 2009. “Sabab.” In: *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics* IV: 101–102.
- Esseesy, Mohssen. 2006. “Apposition.” In: *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics* I: 123–126.
- Kasher, Almog. 2010–2011. “Early Transformations of Theories about *anna* and *an* and the Standardization of Arabic Grammatical Tradition”. *Zeitschrift für Geschichte der Arabisch-Islamischen Wissenschaften* 19. 243–256.
- Kasher, Almog. 2012. “The Term *Mafʿūl* in Sībawayhi’s *Kitāb*”. *The Foundations of Arabic Linguistics. Sībawayhi and Early Arabic Grammatical Theory*, ed. by Amal E. Marogy, 3–26. Leiden & Boston: Brill, coll. “Studies in Semitic Languages and Linguistics” 65.
- Larcher, Pierre. 1991. “D’une grammaire l’autre: Catégorie d’adverbe et catégorie de *mafʿūl muṭlaq*”. *De la grammaire de l’arabe aux grammaires des arabes*, ed. by Pierre Larcher, *Bulletin d’Études Orientales* 43. 139–159.
- Levin, Aryeh. 1979. “Sībawayhi’s view of the syntactic structure of *kāna wa ʿaxawātuhā*”. *Jerusalem Studies in Arabic and Islam* 1. 185–213.
- Levin, Aryeh. 1991. “What is Meant by *al-mafʿūl al-muṭlaq*?”. *Semitic Studies: In Honor of Wolf Leslau on the Occasion of his eighty-fifth Birthday, November 14th, 1991*. Volume II, ed. by Alan S. Kaye, 919–926. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Okazaki, Hideki. 2022. “Ibn as-Sarrāġ’s Classification of Pseudo-Objects and the Grammatical Concept of *faḍla*.” In: *The Foundations of Arabic Linguistics V. Kitāb Sībawayhi, The Critical Theory*, ed. by Manuel Sartori & Francesco Binaghi, 179–197. Leiden & Boston: Brill,

- coll. “Studies in Semitic Languages and Linguistics” 107.
- Owens, Jonathan. 1991. “Models for Interpreting the Development of Medieval Arabic Grammatical Theory”. *Journal of the American Oriental Society* 111/2. 225–238.
- Peled, Yishai. 1999. “Aspects of the Use of Grammatical Terminology in Medieval Arabic Grammatical Tradition”. *Arabic Grammar and Linguistics*, ed. by Yasir Suleiman, 50–85. London & New York: Routledge Curzon.
- Sakaedani, Haruko. 2019. “What is Definiteness in Arabic? Focusing on Proper Nouns for Gender and *asmā’ mubhama* ‘Ambiguous Nouns’.” In: *The Foundations of Arabic Linguistics IV. The Evolution of Theory*, ed. by Manuela E.B. Giolfo & Kees Versteegh, 233–252. Leiden & Boston: Brill, coll. “Studies in Semitic Languages and Linguistics” 97.
- Sartori, Manuel. 2010. “Les «six noms» : grammaire arabe et pudibonderie”. *Synergies Monde Arabe* 7. 35–45.
- Sheyhatovitch, Beata. 2019. “Five as a Typological Number in the Medieval Arabic Grammatical Tradition”. *Journal of Arabic and Islamic Studies* 19. 81–111.
- Taha, Zaynab A. 2008. “Maf’ūl”. *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*, III, ed. by Kees Versteegh et al., 100–106. Leiden & Boston: Brill.
- Talmon, Rafael. 1981. “Appositival ‘*atf*’: An Inquiry into the History of a Syntactic Category.” *Arabica* 28. 78–292.
- Versteegh, Kees. 1995. *The Explanation of Linguistic Causes. Az-Zağğāgī’s Theory of Grammar*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins, coll. “Studies in the History of the Language Sciences” 75.
- Wright, William. 1967. *A Grammar of the Arabic Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 岡崎英樹 2003. 「アラブ伝統文法における maf’ūl の下位範疇 —イブン・アッサッラージの分類とそれ以降の変遷—」『関西アラブ・イスラム研究』3. 15–32.
- 岡崎英樹 2020. 「アラブ伝統文法における『余剰』の概念について」『アラブ・イスラム研究』18. 41–57.